

看護師と僧侶 二足のわらじ

看護師と僧侶という二足のわらじを履く。49歳で仏の道に入り、徳島市内の病院に勤務しながら、上板町椎本の昌光寺で副住職を務める。看護師として勤務中も多忙な業務の隙間時間をどうにか生かし、「死や苦悩、不安と向かい合う人たちの心に寄り添いたい」と話す。

今年2月、徳島市内のある病院には、一組の夫婦を見守る南さんの姿があった。妻は末期の肺がん。夫の丸山肇二さん(71)は徳島市津田町1は病院に足しげく通い、「延命治療はしない」と望んだ妻の最期を支えた。南さんは、丸山さんがいないときも、妻に「1人ではない」ことを伝えるため、そばに行って手を握り、話し掛けた。症状が悪化し

阿南市羽ノ浦町中庄

南 千代さん(56)

た日、自分の化粧ボーチから口紅を取り出し、拭いた後、唇に塗ってあげた。

「旦那さんの前でいつまでもきれいでいたい、そんな思いがこれまでの会話や様子から伝わってきたから」。その後、息を引き取ったときの妻の表情を、丸山さんは「安心したような顔だった」と振

宗教生かし患者癒やす

り返る。

丸山さんは南さんが持つ包み込むような雰囲気、何だか普通の人の人とは違う、という感じがした」と話す。後日、僧侶であると知った。

南さんは、僧侶であることを患者らには伝えていない。「医療の

世界はとても合理的。救える命を救う。看護師としている。43歳のころ、縁のある。それを実践しようとしていた。

丸山さんは南さんが持つ包み込むような雰囲気、何だか普通の人の人とは違う、という感じがした」と話す。後日、僧侶であると知った。医療職と宗教職を同時に、完全に両立させるのは難しい。ただ、この二つの職をずっと考えてきたこと昌光寺の仕事を手伝うことができることを証明した。南さんは、僧侶であることを患者らには伝えていない。「医療の

業が重なり合う部分もある。心で寄り添うて自身の経験もある。き、東日本大震災が発した点。看護師も僧侶も同じ。たとえ3分でも、話を聞いたり、寄り添ったりできたら、患者や家族の苦しみを癒やす手伝いができ



ア」の重要性が指摘され始める。

「年齢的にもこれが最後のチャンス」と看護師をいったん辞め、修行に専念。住職になる資格を得て、また看護師の仕事に復帰。今は二足のわらじを履く。来年早々には昌光寺の住職に就くことになっている。

今年7月、東北大学で講座を修了し、臨床宗教師という資格を得た。布教を目的とせず、傾聴を基本に心のケアに取り組む宗教者の資格だ。米国では医療機関や軍隊、学校などでこうした宗教者がいるが、日本では東日本大震災を機に、養成が始まったばかりだ。

「人の心は、人の心を癒やすことができることを証明した。南さんは、僧侶であることを患者らには伝えていない。「医療の

春藤 大耿・書
(歌の会会長)



(木下真寿美)